

ルネ・フランソワ・ギスラン・マグリット

René François Ghislain Magritte

(1898年11月21日レシーヌLessines

～1967年8月15日ブリュッセル)

没後50周年記念

皆さんはルネ・マグリットの絵はお好きですか？芸術の好みは人それぞれなので一概には言えませんが、視覚的にすっきりと描かれた絵の中で昼夜が同時に存在する『光の帝国』や、パイプが描かれているのに、「これはパイプではない」との文言が添えられた、矛盾に満ち溢れたおもしろさの『イメージの裏切り』が好きという方は、結構いらっしゃるのではないのでしょうか。一方で、何だか謎めいていて、見て楽しくなる絵ではないとおっしゃる方もおられるでしょう。今年はマグリットの没後50周年にあたるということで、プチポワもこの画家の魅力に改めて迫ってみました。

【マグリットの生涯】

マグリットは1898年にエノー州レシーヌの裕福な商人の家に生まれました。その後1910年に一家はシャトレ(シャルルロワ近郊)に移り、そこで少年ルネは絵画教室に通い始めます。ところが1912年に不幸が一家を襲ったことで、ルネと二人の弟はしばらく使用人と家庭教師に預けられ、さらに一年後、一家は再び引越しをして、ルネは高校へ通います。将来著名な画家になるルネの最初の作品は1915年に描かれたと言われていますが、彼が本格的に絵の勉強を始めたのは1916年で、ブリュッセル美術学校(Académie des Beaux-Arts de Bruxelles)に籍をおき、18年まで学びました。後に彼をキュービズム(Cubisme=立体派)に導くこととなるピエール・ルイ・フルケ(Pierre-Louis Flouquet)を初めとする友とは、この時期に出会います。当時のマグリットの作品は、時代の流れを象徴するかのように、立体派や未来派の特徴を帯びています。1923年、そんな彼の絵画に対する考えを新たにしていたのが、ジョルジョ・デ・キリコの絵、『愛の歌』でした。この作品を見て以来、絵画において何よりも大事なものは思考(idée)であり、美(esthétique)は二次的だと考えるようになります。こうして、1926年にマグリット初のシュールリアリスト作品『迷える騎士』(Le Jockey perdu)が、翌年に『秘密の遊戯者』(Le Joueur secret)が描かれ、現実と想像の世界、そして夢と現実の結合が、彼ならではの絵画として結実していきます。マグリットの絵が「目に見える思考」であると言われ、そこに「言葉とイメージ」の関係が読み取れるゆえんです。もちろん、マグリットがシュールリアリストの画家として世界的に認められるまで、その後さらに時間はかかり、特に第二次世界大戦中の厳しい生活においては、画家も困難やジレンマを強いられ、後に「ルノワールの時代」とくくられることになる作品群を制作するという不本意なこともありました。



映画「Pension Mimosas」のポスター、Magritte作

ところで、マグリットの絵が醸し出す謎めいた雰囲気や、それが見る者に与える不安感について解釈される場で、よく採用されるのが精神分析的アプローチです。これは、何より画家が恣意(しい)的に絵に描きこんだ謎を解明するためのアプローチであるわけですが、マグリットの場合、1912年に家族を襲った不幸な出来事のためでもあります。それは、母レジーナの、ソンブル川での原因不明の入水自殺です。当時13歳だったルネは、母の遺体が川から引き揚げられた際、立ち会っていたと言われており、事件が彼の絵の世界に無意識的に影響を与えているのは当然のことでしょう。『真夜中の結婚』(1926)や『恋人たち』(1928)などの作品は、痛ましい事件の影響下に描かれた例とされています。何はともあれ、彼の絵の世界が、実際そんな問いを引き寄せる性質を持つものであるのは確かです。



このように、人間の心の深層に問いを投げかけるような作品を多く描いたために、悲劇的な側面を取りざたされることの多いマグリットですが、1922年に結婚したジョルジュ・ベルジェ(Georgette Berger)との出会いは、画家にいわゆる幸せや豊かさをもたらしました。彼女は画家のミューズとなり、絵のモデルを務めただけでなく(写実的に描かれたジョルジュの顔が真ん中に囲われて据えられた、その名も『ジョルジュ』(1937)や、美しい女性の裸体が上半分はギリシャ彫刻のように、下半分は生身の体のように描かれた『黒魔術』(Le Magie noire, 1935)など、多くの例があります)、店員として働きながら夫を芸術に専念できるよう経済的にも支えました。そんなジョルジュはマグリットのことを、「夫は役人のようで、ブルジョワ的な雰囲気をたたえていました。彼は自宅で友人たちと静かに過ごすのが好きでした」と言っています。マグリット美術館でも見ることのできるDuane Michalsの有名な写真作品『Magritte Coming and Going』(1965)にとらえられた、スーツにネクタイ姿で黒い帽子をかぶる画家は、画家というより普通の勤め人のようです。

1927年から3年間パリに留学したマグリットがベルギーに戻り、1930年から1954年までの24年間妻と住んだJetteの住まいは、90年代に芸術愛好家を買われて改修され、1999年以来「マグリットの家」として一般公開されています。

ブリュッセルの中心からトラムで少し行ったこの地区にあるタウンハウス形式の建物は、屋根裏部屋を含めると、日本でいう4階まであり、最上階まで巡るにつれ、画家の暮らしと作品のクロノロジーが分かるようになっていきます。従って、観覧者はマグリット夫婦が比較的広い家に住んでいたと思いますが、画家が借りていたのは地上階だけです。二人の生活は慎ましかったといえるでしょう。

この小さな住まいの、庭に面した台所の手前の薄暗い部屋の片隅に立てられた画架上で、画家はシュールリアリスムの大作を含めた全作品のおよそ半分を次々と産み出したのです。慎ましくも、食事を



用意したり手仕事をしたりする妻の姿を身近に感じながら制作することで、安心して仕事に打ち込めたに違いありません。

台所が面した庭の奥には、画家が生きる糧を得るために、「愚かな仕事 (travaux imbéciles)」と



自嘲的に呼びつつ産み出した商業的なポスターや、カタログを弟ポールと共に取り扱っていた会社「スタジオ・ドンゴ」の跡地があります。画家がこの家をそのまま描くことはありませんでしたが、家の細部は多くの作品の中に見つけることができます。「マグリットの家」で観覧者に貸し出される案内書には、その説明もありますので、画家の暮らしに思いをはせながら、ゆっくり見学なさってはいかがでしょうか。

Jetteの家のあと、マグリットはSchaerbeekのミモザ通り97番地に移り、1967年に亡くなるまで住みました。Schaerbeek墓地にある画家の墓には、今も訪れる人が絶えません。

マグリットと「愚かな仕事」

マグリットが「愚かな仕事」と皮肉を込めて呼んだ生計を立てるための仕事は、経済的だけでなく、芸術的にも画家に大きな成功をもたらしました。マグリットにおいて、広告やカタログなどの、画家にとっては二次的な作品が、なぜ芸術的に重要な意味を持つのでしょうか？このことは、実は画家の芸術そのものに関わることなのです。

マグリットの最初の広告作品とされるBouillons Pot au feu Derbaix (1918) は、第一次世界大戦末期に作られました。そこには、ブイヨンの入ったカップを手にした少年が描かれていて、上部に「強い兵士になるために……」、下部に「僕はデルベのポトフを飲みます」との文字が見えます。まだ20歳の画家が描いたこの作品は、当時よく見られた商品広告風です。しかし同じ広告作品でも、この作品と、画家の最後の広告作品とされる、1966年にサベナ・ベルギー航空のために発表した『空の鳥』の間には、大きな違いが見られます。『空の鳥』には、暗い空に羽を広げて飛翔する鳩に似た大きな鳥がいます。その鳩の内部は背景の空からくり抜かれていて、水色の空に浮かんだ白い雲が描かれています。この空と雲の鳥の絵は、マグリットが好んで描いたモチーフで、1940年の『帰還』や1963年の『大家族』に登場する鳥のバリエーションで



す。ところが、よく見ると、『空の鳥』の方がシンプルで、描かれた空や鳥がさらに記号化されているので、数少ない言葉やイメージで可能な限りインパクトのあるメッセージを伝える目的を担う広告に適しています。

このように、マグリットは、同じモチーフのバリエーションを描くことを通して、思考を発展させていきました。その結果、広告やグラフィックアートに大きな影響を与えました。彼が、1950年代半ばにイギリスで誕生し60年代のアメリカで全盛期を迎えたポップアートの先駆者と呼ばれるのはそのためです。1927年から29年の間に複数描かれた『言葉の用法』(L'usage de la parole)や、パイプが描かれているのに、「これはパイプではない」(Ceci n'est pas une pipe)という文字を添えた『イメージの裏切り』(La trahison des images, 1929)

などを見ると、イメージと言葉は等価であり、画家も詩人や哲学者のように、イメージによって感覚や観念を表現できると考えた、画家の偉業が見て取れます。

身近なところで

ベルギーに住んでいると、偉大な画家マグリットが身近に感じられることがあります。作品に描かれた空や夜の風景のシルエットは、空気が澄んだ日に私たちが感じるそれですし、身近な例を挙げれば、2002年まで使用されていた500フラン札には、マグリットの顔と、絵の有名なモチーフが印刷されていました。



マグリットは愛犬家でもありました。ポップアート全盛時代のアメリカで展覧会があると、画家夫婦は飼い犬ルルを飛行機に乗せて同伴しました。ニューヨーク近代美術館で展覧会があった際も犬と一緒にだったため、マグリットはジョルジェットと交代で展覧会を見に建物の中に入ったそうです。

そんな人間的なマグリット夫婦に、サイモン&ガーファンのポール・サイモンが捧げた歌があるのをご存知ですか？1983年に発表されたRené and Georgette Magritte with Their Dog after the Warです。美しい詩とメロディのこの曲、YouTubeで聴けますので、よかったら聴いてみてくださいね。

マグリット美術館 musee-magritte-museum.be

Musée Magritte, 1 place Royale, 1000 Brussels

Tel : 02 508 32 11

火～金10h～17h、週末11h～18h、8ユーロ～

2009年に、王立美術館付属の形でPlace Royaleに開館したブリュッセルのマグリット美術館は、ベルギーのシュールレアリストのアイコンである画家の世界最大のコレクションを誇り、2,500㎡の館内に、234の作品とアーカイヴ(デッサン、写真、パンフレット、ポスター、マニフェスト、映画)が収蔵されている。この7年間でおよそ2百万人と、ベルギー内の美術館で最も多い入館者を誇る。

〈予定されているマグリット関係の催し〉

2017年9月22日～2018年1月28日

〈〈Magritte et l'art contemporain〉〉

現代の美術作品にみられるマグリットの存在感を示す。

〈〈Magritte & Marcel Lecomte〉〉

作家・芸術批評家・ベルギー王立美術館の協力者であったルコントは、マグリットの絵画的見方を革新させたキリコの作品を紹介した人物。二人の交友関係を明らかにする写真や資料、ルコントが画家について書いた未刊の作品、交わされた書簡などを展示。

マグリットの家 <http://magrittemuseum.be>

Musée René Magritte, Rue Essegheem 135, 1090 Jette

Tel : 02 428 26 26

水～日10h～18h 7.5ユーロ

1) 没後50周年記念日の自転車散策 Magritte: toujours si tendance ! <http://provelo.org/fr/agenda/tour/magritte-toujours-si-tendance-0> スカールベーク墓地など

2) 街を巡るガイドツアー

予約 : 02 428 26 26あるいはメールinfo@magrittemuseum.be

アトミウム atomium.be

l'Atomium Square de l'Atomium, 1020 Laeken

Tel : 02 475 47 75

9月21日から〈〈Atomium meets Surrealism〉〉の催し